

『VTS：対話による美術鑑賞』 とびら亭 らい都 （とびら-8期 卯野右子）

妻に頼まれ子どもと一緒に美術館に出かけた夫

VTS と呼ばれる対話による美術鑑賞を体験して確信したことは・・・

お富士 「お前さん、ちょっと聞いとくれ。となりのおかみさんからいい話を聞いたんだよ」

夫 「なんだい、お富士、いい話って。儲け話かい？」

お富士 「違うよ。なんでも紐育（ニューヨーク）の MoMA とかいう美術館の偉い先生が考えた
VTS っていうのがね・・・」

夫 「もーまーの、ぶって吸うって・・・なんだ？」

お富士 「だれもぶって吸いなんかしないよ VTS！」

夫 「VHS？」

おふじ 「VHS なんて今時だれも使ってないよ。VTS だよ！」

夫 「その VTS っていうのがなんなんだい？おまけにモーマーって牛じゃなからうし、しまらない
名前だなあ」

おふじ 「モーマーってのはニューヨーク近代美術館の頭文字をとったらしいよ。そこで開発された
VTS 美術鑑賞法ってのはね、絵をよーく見て考えるってことらしいんだよ」

夫 「なんだかカタカナが多くてややこしいなあ。それで、よく見て考えると、どんないいこと
があるんだい？」

お富士 「なんでも、自分の目でよーくみて、人の話もよーくきいて、そんでもって、自分の感じた
ことや考えたことをみんなと話し合うんだって。すると、みる力、聞く力、考える力、話
す力がつくらしいんだよ」

夫 「そんなもんかね～」



東京都美術館 × 東京藝術大学
とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご
〈とびらプロジェクト活動 編〉

お富士 「そんでき、この鑑賞法が、子どもにも、うってつけらしいのき。トビ吉が、人の話をよく聞いて、考えられる子になったらうれしいじゃないかい」

夫 「そりゃそうだな」

お富士 「だからおまえさん、こんどトビ吉を連れて、トビカンと呼ばれる東京都美術館に行ってきておくれでないかい。VTSを体験できるってことだから」

夫 「あいよ。じゃあちよいとってくるよ」

お富士 「どうだったい？」

夫 「あーおふじ、良い絵をみたよ。葛飾北斎先生の『凱風快晴』素晴らしかったね～。赤く染まった富士の山の雄大なこと。あの小さな紙に、なんであんな大きな富士が収まるのかが不思議だね～」

お富士 「なにバカなこと言ってんじゃないよ。それでどうだったんだい、VTSっていう鑑賞法は？」

夫 「いやあ、楽しかったね～ おなじ絵をみているのに、感じることは人それぞれだってことがよくわかったよ」

お富士 「そうなのかい？」

夫 「たださ、なんでもアートで人と人、人と作品を繋ぐ活動をしているとびラーとかいう人がさ、3つのことしか聞かないんだよ」

ひとつ 『この絵の中でなにが起っていますか？』

ふたひとつ 『どこからそう思いましたか？』

そして、みつつ 『他になにか発見がありましたか？』 ってさ」

お富士 「あらまあ！」

夫 「おいらが『夕陽に輝く富士のお山が赤く染まって綺麗だなあ〜』と言ったらさ・・・『どこから夕陽と思いましたか?』 ってきたもんだ」

お富士 「それでお前さん、なんて答えたんだい？」

夫 「どこからそう思うかっていわれてもね・・・赤いもんは赤いってしか・・・。ところが『これは夕陽ではなくて朝焼けなんじゃないか』 っていうやつがいてさ」

お富士 「へー、それで？」

夫 「そしたら、またとびラーが『どこからそう思うんですか』 って聞くんだよ。そいつもまごまごしてたよ」

お富士 「そりゃ、困っちゃうね」

夫 「おなじ絵見てるのに、夕陽だと思ふ俺みたいのが居れば、お天道様がのぼってきた朝と感じるやつもいたわけだ。そこでトビ吉が言ったんだよ！」

お富士 「なんて？」

夫 「この絵がどの方角から見て書かれたかによって、時刻がわかるんじゃないかってさ！」

お富士 「たいしたもんだね〜、トビ吉は」

夫 「それから、こうきた。『富士のてっぺんに少し雪があるってことは夏じゃない。空に浮かぶ翳雲から季節は秋なんじゃないか』 って」

お富士 「そうだったんだね。うれしいじゃないかい。トビ吉はよーく見て、考えることがもうできていたってことなんだね」

夫 「俺も内心鼻高々さ。トンビが鷹を産んじゃったのかい！いやいや、産んだのはお富士、おまえだったな・・・」

お富士 「それで、おまえさん、話が戻るけど、どっちだったんだい。朝日か夕陽か？」

夫 「いや、どっちは教えてもらえなかったんだよ。ほんとのところどうなんだろうねえ。まずはじっくり絵をみて、思ったり感じたりしたことを言葉にするのが大切なんだってさ」



東京都美術館 × 東京藝術大学
とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご
〈とびらプロジェクト活動 編〉

お富士 「そうなんだね～ おまえさん。トビ吉はなんか人とずれているところがあるじゃないか。突拍子もないことを言ったり、人と同じことができなかったり。わたしゃ、なんだか心配だったんだよね」

夫 「お富士、心配はいらねえよ。人は人。自分は自分。思ったり感じたりすることは誰にも否定できねえ。大丈夫だ。トビ吉はトビ吉で良いんだよ。」

お富士 「そうだね、おまえさん」

夫 「あー、北齋先生も相当の奇人らしいよ。でも絵を描かせりゃ誰にも真似できねえ」

お富士 「ほんとだね。あら、トビ吉、ところで宿題は終わったのかい？」

トビ吉 「うん、終わったよ」

お富士 「ちょっとみせてごらん。あれ、真っ白じゃないか。どこが終わったんだい？」

トビ吉 「終わってないってどこからおっかさんはそう思うの？」

お富士 「思うもなにも真っ白じゃないか。終わったとはとても見えないよ」

トビ吉 「おっかさん、真っ白でもおれの頭の中ではちゃんと終わってるんだよ。他になにか発見はある？ よーく見て、考えてね～ じゃ、くにちゃんとか、遊びにいつてくるね～」

お富士 「ちょ・・・ちょっとお待ちよ・・・はああ～とび吉、飛んでっちゃったよ・・・都美館で見た秋の空じゃあるまいし、お前さんにそっくりだね」

夫 「どこがさ？」

お富士 「飽きっぽいところ・・・」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！ とびらくご

<とびらプロジェクト活動 編>

「つながる」 とびら亭けんざかい (とびら-9期 小川恵奈)

「あいつ…何してるんだ？」パソコンの前でニヤつく愛娘の姿にロックオン

ちょっとお調子者の父が娘に声をかけると…

ドンドン (戸を叩く音)

父 「のり子、お前…さっきからパソコンの前でニヤニヤしたり、両手で大きな輪っか作ったり、大丈夫か、熱でもあるのか？小さい時みたいに、熱はかってやろうか？」

娘 「お父さん、シーッ！ちょっと今、打合せ中」(ささやくように)

父 「宇宙人へ手旗信号でも送ってるのか？」

娘 「だから、もう、あっち行ってってば！」(ささやくように) あれ…音声きこえなくなった、フリーズしてる。お父さん邪魔するし、電波悪いし…もう、最悪」(ひとりごと)

「すみません、ちょっとうち電波が悪くて、のりP、1回落ちまーす」

父 「のりP!?! じゃ、俺、のりPパパ？ハハ、驚いたね～」

娘 「お父さ～ん、いつからここにいたの？バーチャル背景みたいに。それにこの家、電波悪すぎだよ～」

父 「『いつから』って悪いけど父さんはお前が生まれる前から、ずーっとこの家にいるよ。電波が悪くても心が通じてたら、それでいいじゃないか。で、何してたの？」

娘 「ああ、今日は「とびラー」の打ち合わせ」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<とびらプロジェクト活動 編>

父 「ん…まてまて。何ラー？」

娘 「とびラー」

父 「ん…それは…美味しいのか？」

娘 「え？」

父 「ほら…ちょっと前に流行った酒のつまみにも美味いやつ」

娘 「それは「食ベラー」。食べるラー油でしょ、お父さん。全然違うっ！」

父 「んじゃ、何だよ？」

娘 「だから、「とびラー」よ」

父 「とびラー。『トビ？』…のり子、高所恐怖症じゃなかったっけ？」

娘 「違う違う。上野の『東京都美術館』と『東京藝術大学』と市民が連携したプロジェクト『とびら』プロジェクトで活動する人を『とびラー』って言うのよ」

父 「ま、あれか…『アムラー』みたいな総称」

娘 「ちょ…っと違うけど、まあ、「ラー」が「人間」になった点では近づいたかな」

父 「で、何してるの？その「とびラー」ってのは？」

娘 「別名『アート・コミュニケーター』って言ってね…お父さん、ちょっと見て、これHP」

父 「何…『美術館を拠点にアートを介してコミュニティを育むソーシャルデザインプロジェクト』？」

娘 「そう『モノと人』や『人と人』『建物と人』を考えて、いろ～んな人が集まる場づくりをしてるの」

「自由に集まって色んな物の感じ方や見方を味わえる場所を作るのよ」

父 「味わう？あ～あ、おつまみパックみたいなことか！

それぞれ個性があって『粒違いで美味しいね！』って」

「でも、父さん、ザラメはちょっと苦手だな。母さんは好きだって言うけど」

娘 「お父さん、すぐお酒の話になる」

「ほら、この『ミュージアムスタートあいうえの』という子どもたちのミュージアムデビューを応援するプロジェクトでね、この間ワークショップをしたんだけど、自分の意見を言ったり、他の人の意見を真剣に聴く姿がキラキラしててね…」

父 「わかるよ～。父さんも、昔～々、お前が小学校の時、授業参観でお前が発表するのにドキドキしてね」

「『神様仏様、ここにいる全てのお父様お母様、私に似てちょっとおっちょこちょいでお調子者ですが心の優しい我が娘に、どうかどうかあたたかな視線をお向け下さい。』ってお祈りしてな、終わった時『よし！』ってグーでガッツポーズしたら、お前チョコキ出してる父さんの方、見たよな。わざわざ負けに来るなんて、親孝行な娘だよ。のり子、いい顔してたぞ」

娘 「あれ、ピース！」

父 「へえ～…『アート』って言っても、アートの難しい知識ってよりは人とコミュニケーションして、『つながる』ってのが大事なんだな」

娘 「そうそう。だから私も、どうしたら『その人らしさ』を出してもらえるかを勉強してるのよ」

父 「ふうん…それに上野っていったら色んな国や地域の人に来て、まさに『出会いの宝石箱や～！』って感じだな」

娘 「そうね。だから私自身も沢山「つながり」が体験できて楽しいわ」

父 「色々やってるんだなあ…ふうん…あ、父さん、イイこと思いついた」

娘 「何？」

父 「とびラーが、上野公園の大道芸を見て言いました」

「ぶっ飛びー！」

娘 「ん、もうまた～。少しはおやじギャグ、我慢できないの？」



東京都美術館 × 東京藝術大学
とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご
＜とびらプロジェクト活動 編＞

父 「おいおい、「おやしギャグ」は我慢したら健康（からだ）に悪いんだよ」

「長生きは健康（からだ）が資本だからな、頼むよ。健康（からだ）といえば、ここ最近『三密』でそうそう人が集まれないよな。とびラーの活動はどうしてるんだい？」

娘 「コロナの影響ね。さっきもやってたけど、オンライン会議で集まれるから大丈夫よ」

父 「ああ！あの流行りの『ムズムズッ！』とかいうやつ、のり子もやってるのか！」

娘 「いやだ、Zoom ね！そう、オンラインだから日本中・世界中から参加できて簡単に『つながる』ことができるのよ」

父 「おお、世界中か、そいつはすげえな。イツアスモールワールドてか。ああ、なんかちょっと…小難しいこと言ったら、肩凝っちまったな」

「お、おい、のり子、肩もんでくれないか？」

娘 「…（沈黙）」

父 「あれ、聞こえてないのかな？」（ひとりごと）

「ちょっと、のり子～、肩もんでくれないか～？」

娘 「…えッ？」

父 「だから、肩もんでくれって」

娘 「…お父さん、ごめん。この家、電波悪いから今『つながらない』みたい」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<とびらプロジェクト活動 編>

『VTS』 とびら亭らぶ里い (とびら9期 宮下美保子)

とびらの活動にいそしむ妻と休みの日は妻と過ごしたい夫のほぼ実話

夫 「おいおい 今日も出かけるのか？ とびらってやつに？」

妻 「そうよ」

夫 「もー休みになるといえないのは寂しい！！

いったい とびらってのは何なんだ？ 上野に行って何やってるんだ？」

妻 「絵を描いたり、お菓子箱でカメラを作ったり、消しゴム彫ったり、ものまねしたり…」

夫 「なんだよ。子どもみたいなことを…」

妻 「あとね、彫刻作品を磨いたり、動画を撮ったり、VTSしたりもするわよ」

夫 「何をやってるやら。聞けば聞くほどわからないや。VTSってなんだ？」

妻 「Visual Thinking Strategy 対話を通じた鑑賞の方法よ」

夫 「なに？？ 対話を通じた？ いつも僕たちも対話しているね」

妻 「そうね。 VTSでは目の前の絵を見て話すのよ」

夫 「絵を見て話すのか、君の目は見なくていいのか？」

妻 「ん～もう 私目じゃなくていいの！！」

「キャプションや事前の情報にとらわれなくて、絵をみて発見したことを見ている人たちで

シェアしあうの。そうするとね、ぐっと絵が身近になって理解が深まるのよ。

VTS V ビビッ T ときて S 好きになる。

ビビッときた感じを大切に絵を鑑賞するって感じかな」



東京都美術館 × 東京藝術大学
とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご
<とびらプロジェクト活動 編>

夫 「ビビッときて好きになるって、君と僕の出会いと同じだね」

妻 「まったく。何年も前のことを…」

「V ブーブー言わないで T たまには S 好きにさせて～！！

じゃあ 行ってきまーす」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<とびらプロジェクト活動 編>

『とびラー募集?』 とびら亭半そで (とびラー9期 荒井茂洋)

とびラー募集の看板の前を通りかかった1人の男性。さて、どうする?

荒井 「とびラー活動が分かる、絶賛開催中?ちょっと覗いてみるか」

しげもん 「こんにちわ。とびラーの“しげもん”と申します」

荒井 「こんにちわ。“荒井”と言います。今そこの看板見てきました。

とびラーって、いったい何ですか?」

しげもん 「荒井さん、とびラーとは、東京都美術館と東京芸術大学が、連携して行っている
とびらプロジェクトで活動する、アートコミュニケータの愛称です」

荒井 「しげもんさん、なん〜か、いまいち、分かりづらいですね。

もっと簡単に教えて?」

しげもん 「そうですね。荒井さん、美術館の楽しみ方を沢山知っている人。いつも美術館での
楽しみ方を考えている人です。

日頃は、ここアートスタデイルームで打ち合わせや、ワークショップを行っていま
す。今日は、その活動を荒井さんにも体験していただこうと思っています!」

荒井 「しげもんさんは、結構なお年に見えますが、とびラーは、あなたのような方が多いん
ですか?」

しげもん 「いえいえ、荒井さん。私たちとびラーは、年齢も背景もバラバラです」

「下は、18歳の若者から、上は、私のような高齢者まで、

職業も、学生、サラリーマン、子育て中、セカンドライフと様々で、社会の縮図のよ
うな構成です。でも活動は、フラットな関係で、誰が上でも下でもなく、付き合ってお
ります」



東京都美術館 × 東京芸術大学
とびらプロジェクト

みんなで作る! とびらくご
<とびらプロジェクト活動 編>

荒井 「しげもんさんは、若者に交じって活動するなんて、見上げたもんだ。

あれっ？ どうしたの？ 急に泣いちゃって？」

荒井 「なにになに、褒められて嬉しかったので、ついうれし泣き！

なるほど、上野の駅前で配っていたこのポケットティッシュあげるから、
これで涙を拭いてください」

しげもん (三好鉄生の”涙を拭いて”の曲に載せて)

「涙を拭いて、抱きしめ会えたら！ あの日の二人に、戻れるはずさ！」

荒井 「あ～びっくりした！ しげもんさん、急に歌いだして、どうしたの？」

しげもん 「荒井さん、済みません。

泣いた時には、この歌を歌って、気持ちを切り替えてるんです」

荒井 「面倒くさい人に関わっちゃったな。

しげもんさん、とびラーの活動覗いてきますね」

荒井 「会場は、凄い賑やかだな～。どこから見ていくか！」

「“鉄道とアート”。いきなり鉄っちゃんの話がでてきたね。

“あなたは、鉄道路線図にアートを感じませんか？”はあっ？

(リパブリック賛歌の曲に載せて)“まあ～るい緑の山手線、真ん中通るは中央線”

ってあれですかね？って、しげもんさんの癖がうつっちゃったじゃない！」

「何？ 歌が上手いって、褒められちゃった！！」

荒井 「次は何だ。みんな無言で模造紙に書いている？」



東京都美術館 × 東京藝術大学
とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご
〈とびらプロジェクト活動 編〉

荒井 「筆談で対話型鑑賞。言葉を発しないで、作品を見て、感じたことや思ったことを書いて、対話しているんだ。

耳の不自由な方でも参加できるね。試しに書いてみよう。

えっ、“流れるような美しい字”だって。この字が？またまた褒められちゃった！」

荒井 「どんどん面白くなってきたね。さて次は何だろう？」

『“とびラジオ”。ラジオ仕立てにして、音声で作品鑑賞をお伝えします』

早速やってみよう～。

歌川国芳作 蛸の入道五十三次 品川宿より。

『タコハです。今日はここ品川宿からレポートします。

タコ墨団子屋の看板娘、タコ実さんに、それではインタビューしてみましょう。』

“語りが個性的”って、また、また、また褒められちゃった！！！」

荒井 「さて今度は、何だろう？」

「おうちでものまね美術館?? 一体どんなことをするんだ???

描かれた人のかっこうをまねる。自宅にあるものを使ってやる。タオルを姉さん被りにして、足元のバケツを軽く小脇に抱え、少し前に傾ける。

フェルメール作、『牛乳を注ぐ女』見えるかな？」

「『雰囲気出てる』って、また、また、また、また褒められちゃった！」

荒井 「あ～ ら、ら、こんなに時間経っちゃった。そろそろ帰らなきゃ」



東京都美術館 × 東京藝術大学
とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご
〈とびらプロジェクト活動 編〉

しげもん 「荒井さん戻ってきたね
如何でした？ スキップして、そんなに楽しかったですか？」

荒井 「しげもんさん、あちこちで褒められちゃいましたよ」

しげもん 「荒井さん、とびラーの活動では、やってみたいことを差し出しあって、誰一人取り残さずみんなと相談しながら創り上げています。荒井さんの個性が光る場所だと思いませんか？」

荒井 「しげもんさん、応募するかどうかは、家に帰って考えてみますわ」

しげもん 「何をみずくさい。荒井さんは、このとび落語には欠かせない主人公のお一人で、仲間も同然です」

荒井 「しげもんさんにまんまと乗せられた！閉まった！！」

しげもん 「荒井さん、とびラーだけに、門戸は開いております」

『とびラーの世界』 とびら亭あーる&美い (とびラー9期 堀内裕子)

彼女がとびラーになった途端、興味関心ごとが変わる様子に戸惑う彼氏。

今日は二人でデートの日。今は美術館に向かう途中です

男 「あのさーどうでもいいけど、3回つづけて美術館って・・・今日は西洋美術館か。まあいいけどさ」

女 「だってセイビでロンドンナショナルギャラリーの作品が見られるのよ。すばらしいじゃない。あの「ひまわり」だって来てるってよ。前回トビの浮世絵展もトーハクでみたラブラブアジア展もよかったよねー」

男 「『セイビ』ね～、西洋美術館、「トーハク?」、あ～東京国立博物館・・・「トビ?」はいはい、東京都美術館ね・・・まいいか。(独り言風)」

「なんかさーりさ子、最近「っぽい」感じ、気取ってないか」

女 「ひどい言い方!気取ってるだなんて。今日だって、ちゃんと作品を味わってよね!」

男 「出た!作品を味わう、建築をあ、じ、わ、うね～」

女 「もう、トビは近代建築の巨匠、前川國男の作品なんだから!」

女 「それにトビの敷地内にあるたくさんのオブジェも素敵でしょ。ゆういちくんも入り口にある、私が両手広げたくらい大きい銀色のボール見たでしょ?」

男 「うん知ってるよ。でもさりさ子、覚えている?去年、待ち合わせ場所決めるとき「10時にパチンコ玉のデカイやつのとこね」なんて言ってたくせに～」

女 「あら・・・そんなお下品なこと言ってたっけなあ(ばつが悪そうに)」

そして二人は美術館の中へ



東京都美術館 × 東京藝術大学
とびらプロジェクト

みんなで作る!とびらくご
<とびらプロジェクト活動 編>

女 「うわーVTSしたい作品がいっぱい！では、ゆういちくん！今日は特別にゆういちくんのためにファシリっちゃうよ～」

男 「は？何ってんの？俺のために一体何をパシリしてくれるって？」

女 「いやだ～、ゆういち君のために何も買ってこないって！そのパシリじゃなくて、ド・レ・ミ・ファ♪ ファシリ。 ファシリテート、つまりゆういち君が作品を鑑賞するときに、感じたこととか、言葉にならない思いを文字通り引き出すこと」

男 「で、V・・・V・・・VTR？」

女 「あのねV・T・S。 ヴィジュアルシンキングストラテジー。何人かで対話をしながら作品を鑑賞することなの。まず作品をよーく観察して、そこから気づいたこと、発見したことをみんなが自由に話していくの。何人かで話していると自分じゃ気付かないことに気づいたり、人の発言からまた自分の考えが広がったり、いろんな見方ができるの。だからより深ーくその絵をあ・じ・わ・え・るってわーけ」

男 「ふーん、そうなんだ」

女 「じゃあ、早速これから作品をあ、じ、わ、っていただきます。 (やる気満々な感じで) まずは1分間この絵をよーく見て！はい、1分経ちました！～。では・・・」

男 「あ、ちょっと待ってりさ子。りさ子がこれから言おうとしてることって～

『この絵の中で何がおこってますか？気づいたことを何でもいいから教えて！』だろ？」

女 「そうそう。何でわかったの？」

男 「で、おれが何か言うと、『それはどこからそう思いましたか？』だろ？」

女 「うん。そう」

男 「だってさー浮世絵展で買った絵はがきを使って、りさ子こないだも俺に同じことやったよね！？」

女 「あ、バレた？そうでした～(笑)！？」

「VTSのファシリテーション勉強すると、人に試したくなるんだよね～(笑)」



東京都美術館 × 東京藝術大学
とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご
＜とびらプロジェクト活動 編＞

男 「わかったよ～、りさ子の意気込みはわかったから付き合うよ」

女 「うれしい！！上野はセイビに、トビに、トーハクに、アートを「味わう素」がたくさんあるでしょ。また来ようね」

男 「うん、その「味の素」を見に来るのはいいけどさ。だったらりさ子をもっと作品の「う・ま・み」を引き出せるようにならないとね」

『ZOOM』 とびら亭金の恵比寿 (とびラー9期 登坂京子)

還暦を過ぎてとびラーになったばあばと、とびラー活動に興味津々の孫

パソコンが苦手なばあばがやらかした大失敗とは何!?

登場人物

ばあば (とびラー活動を満喫中。ZOOM に慣れてきてサボることも・・・)

天平 (てんぺい。ばあばが楽しんでいるとびラーになりたくて、つつい邪魔する四年生)

天平 「ばあば！おはよう！遊びに来たよ。ねーねー、今日は何して遊ぶ？」

ばあば 「天平、ずいぶん朝早くからきたね～。今日は一緒に遊べないよ。忙しいの」

天平 「えー！なんで忙しいの？」

ばあば 「今日はね、zoom でお勉強があるんだよ。とびラーのお勉強」

さあ、天平はあっち行ってなさい！」

天平 「やだー！ぼくも zoom やりたーい！」

ばあば 「天平！ダメダメ、これは遊びじゃないの。」

天平 「えー、ばあばだっていつも遊んでみたいじゃないかあ。青いものもってこいと

タオルを頭にのせたりとか…この前は顔をまっしろに塗って、着物着て、猫を抱っこして写真撮ってた。小梅太夫みたいで怖かったよ・・・」

ばあば 「天平、あれはね、宿題。「ものまね美術館」と言って作品の人物になりきるの。だけどあの竹下夢二は失敗だった。自分でも小梅太夫に見えたもんね～」

天平 「ほらあ～、遊んでるんじゃない！」



東京都美術館 × 東京藝術大学
とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご
〈とびらプロジェクト活動 編〉

ばあば 「遊びじゃないってば。遊ぶみたいに勉強してんの」

天平 「じゃあ僕と一緒にじゃん」

ばあば 「違うってば、あんたのは遊ぶだけでしょ!？」

天平 「ばあば、どうしてベットの上にパソコン置いてんの？」

ばあば 「これはあ、うち中でここが一番電波がいいからだよ。(つかれたらすぐに横になれるしね、えへへ)

天平 「ふ～ん、あれっ?!ばあば、テーブルの下に何かある～... これ何？」

ばあば 「あっ、これね～、おやつだよ」

天平 「へー、、、(においをかぐ) うーわっ! くっさあ、ばあば、これなあに？」

ばあば 「天平え触らないのお! そりゃするめ。なめてると、長持ちするからね。お勉強してるとお腹が空くんだ」

天平 「ばあば、それじゃ臭くてばれちゃうよ」

ばあば 「大丈夫だよ、zoom じゃ匂いがわかんないから。それに音もしないでしょ」

天平 「あれ～? なんでみんな小っちゃく切ってるの？」

ばあば 「そりゃあね、天平、小っちゃくしておけば、食べてるのがバレないでしょ」

天平 「わーい😊 僕もトビラーさんになりたいな～♥ するめ食べながら遊びたい！」

ばあば 「だからあ、違うってば! だいたい、あんたはまだ 10 歳でしょ。18 歳にならないと受けられないよ」

「いいかい天平、トビラーさんになるには、先ず申込用紙ととびラーになりたい! って気持ちを含めたレポートを出してそのあと面接を受けて、7 倍という高い競争率を潜り抜けるんだよ」

天平 「えーっ、ばあば面接受けたの？」



東京都美術館 × 東京藝術大学
とびらプロジェクト

みんなで作る! とびらくご
〈とびらプロジェクト活動 編〉

ばあば 「受けたさあ〜」

天平 「ばあばすごいね！、なんで受かったのお？」

ばあば 「そりゃ、やっぱ。。。 (にっこり) 顔じゃないのお〜。おばあちゃんにしちゃ、イケてるからね。(うっとりして) あー、あと5分で始まっちゃう、さっさと出ておいき！」

天平 「あ〜、ばあば〜、後で何して遊んだか教えてね〜〜」

(ガチャ、ドアを閉める)

ばあば 「だからさあ、遊びじゃないつーの！あ〜、やっといった〜

さっ、zoom つけよっと。ぽちっと」

ばあば 「はい、9期 登坂京子です。

えっと〜、電波状況が悪いので、画面 off にしま〜す。よろしくお願いま〜す」

ポチッ

ばあば 「はあ〜〜、これで見えないな。キンチョーした〜、するめでも食べよっかな。横になって聞いてよっとゴロゴロゴロ…ゴロゴロゴロ…」

(寝転がり、するめを食べる)

スタッフ 「ときかさ〜ん、こちらスタッフでーす！起きてくださ〜い。聞こえてますよ！講座中はゴロゴロしないでください！」

ばあば 「はいー!!! え〜 どーして分かったんだろう…」

スタッフ 「登坂さん、いつもそうですよね。横になるときゴロゴロって言っちゃうからですよ」

(ばあば、ぐるりと zoom の画面を見回す・・・あることに気づく！)

ばあば 「わーーーー！画面は off にしたけどミュートにするのを忘れてた…」

(がっくり うなだれる)



東京都美術館 × 東京藝術大学
とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご
〈とびらプロジェクト活動 編〉

『東京戸美術館』 とびら亭青衣 (7期 山中みほ)

注文の多い建築家に翻弄される豪気な職人。ついに完成したサステナブルでダイバーシティな美術館とは?!

世は令和の時代、かの有名な東京都知事は「上野に、かつてないサステナブルでダイバーシティな美術館を作る」と発表した。首都圏中から腕のいい職人たちが集められ、昼夜を徹した作業を続け、美術館はいよいよ完成間近となる。

トンテンカントンテンカン

大工 「よし。あとはタイルを打ち込んで完成だ。見てみろ！こんな完璧な美術館、世界中どこを探しても他にあるめえよ。東京都美術館、略してトビ、たあよく言ったもんだ」

建築家 「おい、そこの大工」

大工 「なんだ爺さん・・・これはこれは建築家の大先生！お久しぶりです。どうです？先生の設計通り、たくさんの柱を並べた列柱空間ができましたぜ」

建築家 「ふむ。左から炎柱、水柱、音柱、恋柱、一つ飛ばして貝柱。どれも見事な出来栄じゃ」

「しかしな、柱の流行りはもう下火になったと聞く。そんなにたくさん柱はいらん。大黒柱一本で充分じゃ」

大工 「ああ？こんなに作った柱を取っ払って作り直せと？そんなことしてたら東京オリンピックに間に合いませんぜ」

建築家 「かまわぬかまわぬ。オリンピックなどまた延期すればよい。頼んだぞ〜」

大工 「作り直しか。仕方ねえ」

トンテンカントンテンカン



東京都美術館 × 東京藝術大学
とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご
<とびらプロジェクト活動 編>

大工 「先生、御覧ください。余計な柱をぜんぶとっばらって、柱一本のただっぴろい美術館ができましたぜ」

建築家 「あのなあ、わしは大黒柱と言ったろう」

大工 「へえ。ですからここへ大きな柱をひとつ、流行りのはしりのはつりのコンクリートで…」

建築家 「もう、おぬしはわかっておらん。よいか。大黒柱という字はな、大きな黒い柱と書く。黒くなければならんのじゃ。柱も壁も真っ白ではないか。ダイバーシティのかけらもなーい」

大工 「美術館っていやあ殺風景な白い部屋だろ？」

建築家 「ほう…美術館は白い部屋、その固定観念がいかんのじゃ。想像してごらん。サステナブルな美術館を…すぐに汚れる白などサステナボー(Sustainable)、ではなーい。柱も壁も何もかも、墨で、真っ黒に塗るのじゃ」

大工 「墨で塗るなんてあんた、正気かい？…そこまで言うなら仕方ねえ」

トンテンカントンテンカン

大工 「先生、できましたぜ！全国からありったけの墨汁を集めて壁という壁、全て黒く塗りました。どうぞ中へお入りなすって」

建築家 「(ご満悦に) そうかいそうかい失礼するよ。なんだ、まっくらじゃな、ここは」

大工 「あぶないですぜ。足元に気をつけて」

建築家 「なんにも見えん！真っ黒で夜のようだよ。なんだ(くんくん)、墨壺みたいなにおいもするな。ううむ、どうにも落ち着かん。居心地がよくない。もっと心地よい美術館でなければ！じやまな柱と壁は取りはらえ！」

大工 「…もうどうなっても知りませんぜ」

トンテンカントンテンカン

大工 「(ドヤ顔で)おまたせしました！風通しはにっぽんいち、最高に居心地のいい美術館の完成だ！」



東京都美術館 × 東京藝術大学
とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご
<とびらプロジェクト活動 編>

建築家 「なんなんだこれは？風通しがよいて、柱も壁も屋根もない吹きさらしてはないか」

大工 「すがすがしい青天井だ～」

建築家 「あるのは扉ばかり。向こうに上野の森がよーく見えるぞ」

大工 「上野は森じゃなくて公園ですぜ」

建築家 「やかましい！上野の森美術館に謝れ！（ため息）扉一だらけの都美術館だと・・・どうしてこうなったんじゃ？」

大工 「令和の世に必要なものは、柱でも壁でもねえ。多様な世界をつなぐ扉でございます。扉との出会いが目玉の、サステナブルでダイバーシティな場所、それがこの東京戸美術館だ！」

建築家 「扉との出会いか。ウェルビーイングじゃな！しかしやっぱり柱はあったほうがよかったかの」

大工 「先生よ、これ以上わがまま言うとしたじゃおかねえ。

そんなに柱がほしけりゃ、あんたをこの美術館の人柱に据えてやるまでよ！！」

建築家 「ヒエッ！やめろ、離すんじゃ大工。おおお主、いったい何者じゃ？」

大工 「俺は大工なんかじゃねえ。俺はなどんなに高い足場も自由自在に飛び回る現場の華、と・び（鳶）、だー（とびラー）」



東京都美術館 × 東京藝術大学

とびらプロジェクト

みんなで作る！とびらくご

<とびらプロジェクト活動 編>